第 6 回 JOHBOC 学術総会

P-25

東京, 2026.05.09-10

RRSO 後に凍結卵子（妊孕性温存）を用いた生殖補助医療で妊娠した *BRCA1* バリアント保持者の 1 例

小西晴久 [1]，中岡義晴 [1]，森本義晴 [2]

[1]IVF なんばクリニック [2]HORAC グランフロント大阪クリニック

BRCA1/2 病的バリアント保持者に対して、リスク低減卵管卵巣摘出術（RRSO）は卵巣癌死低減や乳癌発症予防効果を認め、実臨床で普及が進んでいる。ESMO ガイドラインでは、挙児を終えた病的バリアント保持者では *BRCA1* で 35-40 歳、*BRCA2* で 40-45 歳で RRSO を考慮すべきとされている。今回、乳癌診断後に妊孕性温存で卵子凍結を実施、その後のがん治療および RRSO を経て、凍結卵子を用いた生殖補助医療にて妊娠した 1 例を経験した。

症例は 38 歳、1 妊 1 産。31 歳で乳癌、*BRCA1* 陽性。がん治療に先行し妊孕性温存療法で卵子 9 個凍結。手術療法と化学療法を実施し再発なく経過し妊娠検討中に 37 歳で自然妊娠、正常分娩。その後 RRSO を実施後に当院には第 2 子挙児希望にて受診された。当院にて胚移植前の諸検査実施後に、卵子 9 個に対して顕微授精を実施し、3 日目分割期胚を 7 個獲得した。ホルモン補充周期での凍結融解胚移植を実施し 2 回目の胚移植にて妊娠成立し、妊娠継続中である。

RRSO 実施による妊孕性の喪失は不可逆であるため、RRSO は挙児を終えた人が主な対象である。本症例は 1 経産であり凍結卵子にて妊娠成立しなければ挙児を断念予定であったことから RRSO に踏み切れた一面があるが、妊孕性温存により RRSO 後でも挙児可能であった点は重要である。今後、RRSO の増加に伴い、RRSO 後でも妊娠を希望される症例も増えてくる可能性もあるため、腫瘍医療とがん生殖医療の一層の連携が大切である。(587 字)